

書評

田淵福子著『中世王朝物語の表現』 宮田 光

田淵福子さんは、甲南女子大学の大槻修教授の門下である。卒業論文で『恋路ゆかしき大将』を、修士論文で『松陰中納言物語』を研究の対象として選ばれ、その後も『木幡の時雨』・『小夜衣』などの中世王朝物語について、その表現に関する考察を中心に、精力的に論文を発表して来られた。今回の著書はそれらの成果をまとめたものである。

中世王朝物語は、まだまだ未開拓の分野である。特に『風葉和歌集』以後の物語については、確定的なことは何も言えないと言っても過言ではない状況である。田淵さんがその中で、中世王朝物語の表現の特徴をとらえ、成立に迫ろうと、方法を模索して来られた道筋を、各章の構成を見て思うのである。

第二章『恋路ゆかしき大将』の成立、第三章『松陰中納言物語』の成立、第四章『松陰中納

言物語』における敬語の特殊な用法について、の各章は、中古・中世の膨大な量の作品群の調査に基づき、或いは中世的語句、或いは文末の助動詞・係結び・已然形終止、或いは敬語の用法の乱れなどの検討を通して、中世王朝物語の表現に見られる中世の口語の影響を、語彙・語法から跡づけようとした辛苦が偲ばれる。

第八章『狭衣物語』と百番歌合、第九章『狭衣物語』と『風葉和歌集』、の各章の、『狭衣物語』の鎌倉期の享受の複雑な様相を検討するという緻密な作業を経て、だからこそ、第五章『木幡の時雨』の文章、第六章『あきぎり』の文章、第七章『小夜衣』の引き歌について、の各章で、『源氏物語』・『狭衣物語』を中心とする先行物語の「物語取り」の多様な姿が、輪郭を現わして来るのであろう。

これらの論考は、直ちに成立論上の決定的な

結論を導きだすものとは言えないかも知れないが、中世王朝物語の今後の貴重な基礎的な指標となることを確信するものである。

第十章 資料編 大覚寺本「小夜衣」翻刻、は、以前から見たいと切望していたものである。刊行された「小夜衣」のテキストは、従来学習院大学蔵の二本のみであったが、最近実践女子大学蔵の二本の影印が出ることになった。大覚寺本は、所謂第一類（完本）の中ではやや性格を異にするテキストである。今回全文を掲載していただけたことはありがたい。なお、『大覚寺本「小夜衣」本文と註釈』（上・中は既刊、大槻修・「小夜衣」の会共著）の、田淵さんの御担当の精緻な註に多大の字學を蒙ったことも併せて御礼申し上げたい。

（平成十一年三月二十日 A5判三四〇頁 定価

七、九八〇円 世界思想社）

「みやた・みつ 東海学園女子短期大学教授」